

否定形式ンとセンについて

丹羽 一 彌

0 はじめに

西日本諸方言の多くは「ン」と「セン～ヘン」という2種類の否定形式を持っている。本稿では、愛知県尾張北部地方で使われる「ン」と「セン」について、用法と接続関係という形式的な面に着目して、その相違について述べる。結論を先に述べれば、意味に関しては、「ン」は事実を表現する客観的な否定、「セン」は話し手の判断を表現する主観的な否定であり、文法的に見れば、「ン」は表現内容、「セン」は表現態度である。

今回の話者は以下の3人である。全員が言語形成期以前から現在地で生活していて、移住歴はない。なお筆者丹羽の内省も参考にした。犬山市、扶桑町、江南市は愛知県北西部で隣接していて、この地域に文法面で目立った地域差は見られない。

愛知県犬山市 長谷川 充 (1940生まれ)

愛知県扶桑町 高木 修身 (1940生まれ)

愛知県江南市 後藤 隆明 (1939生まれ)

1 先行研究

各地の方言の文法記述や論文の多くがンとセン～ヘンという2種類の否定形式の存在に言及している。しかし両者の相違を本格的に論じているものは少なく、両者を対にした二三の例文を出して文全体の意味を比べている程度のもが多い。その方言を知らない研究者にも分かるように、文全体の共通語訳だけでなく、当該方言の枠組みの中で文法的に両者の相違を説明すべきであると思う。岐阜愛知など、近畿以東の方言のンとセンについて詳しく論じたものは見当たらなかった。

近畿中央部の方言では、大阪方言を扱った前田(1955)があり、五代目笑福亭松鶴編『大阪落語名作選』に現れたンによる否定表現を分類し、ヘンとの相違を論じている。大阪方言におけるンとヘンの本来の違いは

前者は自己の判断とか感動とかそのものをそのまま表現するのに用いられ、後者は客観的ないしは客観された物事を標的として意識に浮かべつつ、それに対する判断なり感動なりを表現するのに用いられている。

としている。現在の大阪方言のンとヘンはこれと反対になっているが、この点については、ンは「直接的で近道の打消」であるから断固とした否定に使われるようになり、ヘンは「間接的で遠道の打消」であるために、強すぎない否定に使われるようになったと説明している。今読んで教えられる点が多く、評価すべき論考であると思う。しかし強消(つよけし)・弱消(よわけし)、あるいは対他性・対自性などの概念を設け、二つを同じレベルに並べて

説明しようとしている点に問題が残ると思う。愛知県の方言から類推して考えると、辞書的な意味と文法的な働きとに分けて考えるべきである。

これを引き継ぐ形で、山本(1981)は、女子学生の否定表現使用例を表で示し、共通語化の進んだ若い世代でも否定法には「ヘン」が「ない」や「ン」より多いと述べている。そのヘンが優勢となったのは、大阪人の婉曲性への志向のためであるという。これは、方言人の気質という言語外の根拠を持ち出している点で、前田(1955)の間接的な遠道の打消より一步後退している。大阪での若年層の使用についてなど新しい状況を知ることはできるが、両者の相違についての新しい見解は乏しい。

近畿中央部以西の方言では、宇和島方言を扱った工藤(1992)がある。宇和島方言でのンとヘン(工藤氏の用語ではセン形とスラヘン形)の否定文の相違は、前者が事態の客観的側面に関わる客体的否定(propositional negation)であり、後者は話し手の態度的側面に関わる主体的否定(modal negation)であるとする。叙述文に関しては、前者が「事態の不成立性(文の対象的内容=命題としてある事態が存在しないこと)」の「話し手による確認・記述」という客体的否定文であるのに対し、後者は主体的あるいは主観的・情意的否定文であり、次の二つの意味・機能をもっているという。

1 「事態成立(肯定性)」への「他者の確信」に対する「話し手の否認」

2 「事態成立(肯定性)」への「期待の不成立」に対する「話し手の不本意性」

工藤氏の論はさらに質問文や依頼文など多方面に及んでいる。これは雑誌の特集「各地録音紹介-文字化と解説」の一部として載せられているものであるが、とてもそういうレベルの紹介や解説などではない。方言の二つの否定形式について述べたものでは、上の前田(1955)と並んで、最も詳しく、且つ核心をついていると思う。ただし筆者のような形式重視の古い立場から取えて言えば、この工藤(1992)も説明が文例とその意味だけに偏り過ぎている。上記のような特集の一部であるから仕方のなかったことかもしれないが、文や述語の構造など、もう少し形に関する記述的な面からも検討してほしかったという思いは避けがたい。

2 ンとセンの形

当方言のンとセンは動詞だけに接続する。「書かれる」「書かせる」のような派生動詞にも接続するが、形容詞などには接続しない。ンとセンは五段型動詞でいうと、それぞれア段の活用形とエ段の活用形に接続する。他の型の動詞もそれに準ずる。

書く カカ・ン (kak-a-N) カケ・セン (kak-e-seN)

見る ミ・ン (mi- ϕ -N) ミエ・セン (mi-e-seN)

先行する動詞の活用形には、ミーセンなど個人差の見られる場合もあるが、本稿は動詞の記述文法を目的としていないので、詳細は省略する。

ンとセンは否定の「助動詞」として、下のように活用する。括弧に入れた形式は、当方言の確定した形式かどうか疑問符の付くものである。センの連体修飾表現には後に述べるように個人差が何か不明な点があるので、括弧に入れておく。また本稿で扱う範囲で地域差は見られないが、場面や個人によって、特に若年層においてセン～ヘンというゆれがある。本稿ではそれをセンで統一しておく。

終止	連体	仮定	音便
ン	ン	ナ	ナン
セン	(セン)		セナン

3 ンとセンの意味

ンとセンとは異なる活用形に接続するので、完全な同一環境の中には現れない。しかしこれは接続に関する手続上の相違であって、当方言では意味や役割に関係しない。先行の活用形以外の環境を同一にして比べると、ンとセンの意味の相違は以下のようである。

- (1) アメガ フラン (雨が降らない)
- (2) アメガ フレセン (雨が降りほしない)

(1)のフランは「雨が降らない」という否定的内容を、話し手が自分の心情とは関係なく事実として客観的に叙述した否定表現である。それに対して(2)のフレセンの方は、話し手の置かれた状況では当然実現すると予想され、その結果が話し手に及んでくると思われる「雨が降る」という肯定的内容を、話し手が自分の判断で否定するという主観的な否定表現である。これは自分の立場に立って述べているので、場面における具体的な意味は、降る時期になっているのに残念ながら待っている雨が降らない、天気予報によって傘を用意して来たのに実は降らないというような、それが実現しないことへの話し手の評価や感情をこめた否定表現ということになる。

予想されることの非実現という点では、宝くじに「当たる」などが適当であろう。宝くじの場合、絶対当たらないというのが客観的な否定であり、全体として見れば必ず誰かに当たるのに、自分達には当たらないという気持ちの表現が主観的な否定である。

- (3) タカラクジワ アタラン (宝くじは当たらない)
- (4) タカラクジワ アタレセン (宝くじは当たりほしない)

上の(3)は「当たらない」ということを客観的に叙述している。アタランは100%当たらないということである。これは前田(1955)の大阪方言のような強い否定ではない。買わなければ絶対に当たらないから、アタランは「同一平面上の平行線は交わらない」というのと同じくらい普遍的な真理を客観的に述べているのである。これは当たらないことを命題として述べていて、事実と矛盾する表現であるが、現実には当たらないことが多いので、(3)のように使っても実際はそれほど不自然ではない。

それに対して(4)のアタレセンは、予想(期待)されることを当事者としての立場で否定している。当たる可能性は皆無ではないが、自分の主観的な判断では自分達に当たることは多分ないだろうという、万が一の期待に対する自嘲や慰めの表現ということになる。このようにセンは、前後の状況から実現する(宝くじの場合は確率が低い)と予想される内容を、話し手が自らの立場から期待や評価などを込めて否定するという主観的な表現である。従って

- (5) カワナ アタランガ カッテモ アタレセン
(買わなければ当たらないが 買っても当たりほしない)

のように対比させれば、意味の相違がはっきりする。

主語が雨や宝くじの場合は、話し手はこの実現・非実現に関係しない。しかし主語が人であれば、話し手または他者が主語になる。そのどちらの場合でも、センは話し手という立場からの主観的否定であり、主語の立場ではない。なお他者が主語というのは、相手の場合と第三者の場合とがあるが、本稿では話を簡単にするために、第三者に限定する。そのため以下で3人称となっているものには相手を含んでいるものがある。

- (6) サケ ノマン (私は/太郎は、酒を飲まない) 1・3人称の事実
 (7) サケ ノメセン (私は酒を飲まないつもりだ) 1人称の意志
 (太郎は酒を飲みはしない) 3人称への評価・期待

(6)のノマンは「酒を飲まない」ことを客観的に叙述した事実の表現である。話し手の心情は含まれていなくて、ただ「酒を飲まない」という情報だけを伝えている。この場合、その具体的な意味は、下戸だから飲まない、今日に限って言えば飲まない、ビールを飲むから「酒」は飲まないなど、場面によっていろいろであるかもしれないが、飲まないことを事実として表現している。

これに対して(7)ノメセンは、今の状況（例えば本人が飲兵衛で、今日は忘年会）では「飲む」のが当然予想されるのに、「実はそうではない」と話し手が自分の判断を交えて否定している。その具体的意味は、主語が1人称であれば、今回は酒を飲まないという話し手自身の意志の表明となるし、3人称の場合は、その人が酒を飲まないことに対する賞賛、または失望や軽蔑など、話し手による評価となり、場合によっては飲まない意志を期待する表現となる。これはイントネーションで区別され、1・3人称の未来のことに言及する場合は平板調、3人称に対する現在の評価の場合は下降調である。

ンもセンも非過去と過去がある。センの過去は、肯定的内容の主観的否定の過去、つまり非実現という過去の判断がその通りになったという意味である。人が主語の場合は、既に済んだことであるから、意志や目標が達成されたという意味であり、3人称では期待通りの結果への評価となる。

- (8) アメガ フレセナンダ (雨が降りはしなかった)
 (9) アタレセナンダ (当たりはしなかった)
 (10) サケ ノメセナンダ (私は酒を飲みはしなかった) 1人称の予定達成
 (太郎は酒を飲みはしなかった) 3人称への評価

以上のように、ンは内容を事実として述べるだけであるが、センはそれに対する話し手の判断を含めて表現している。当方言のンとセンの意味の相違は次のようである。

ン [話し手が【主語が～しないこと】を客観的に叙述する]

セン [話し手が【主語が～すること】を自分の立場で主観的に否定する]

工藤(1992)では叙述文のセンの意味を二つに分けている。それはそのまま当方言にもほぼ適用できるが、二つに分けることにそれほど意味があるとは思えない。状況から予想されることについては、話し手が確信・期待するか、他者が確信するかのどちらかである。あるいは両方一緒にとということもあるかもしれない。そのどちらの場合であっても、話し手は、その内容の非実現に対する自分の立場からの判断や気持ちを含めてセンで否定するのである。従って当方言では上のように一つにまとめられると思う。特に強調して

- (11) アメナンカ フレセンヨ (雨なんか降りゃしないよ)

のように、当然降ると思っている相手の期待や危惧を否定して、話し手の判断を主張しているのであれば、他者の確信を否認する表現ということになる。しかし他者の確信は前後の状況からの一つの結果であると思う。他者の確信という特別のものがなくても、当方言では自分の予定や意志をセンで否定的に述べるので、上述のように一つの意味にまとめることができる。

4 ンとセンの用法

4.1 ンの用法

ンは、断定、連体修飾、仮定表現など、全ての表現に用いられる。ただし当方言のンには共通語の連用形に当たる形式がない。従って「降らなくなった」のように連用形「なく」を用いる表現は、そのままを当方言の方言形に置き換えて直訳することはできない。否定の連用表現には、ン+ヨーニを用いる。ンの「活用形」かどうかは別にして、中止法のズはある。以上のことは人が主語になっても同様である。

- (12) アメガ フラン (雨が降らない)
 (13) アメガ フラナンダ (雨が降らなかった)
 (14) アメガ フラン トキモ アル (雨が降らないときもある)
 (15) アメガ フラナ カサワ イラン (雨が降らなければ傘はいらない)
 (16) アメガ フラン ヨーニ ナッタ (雨が降らなくなった)
 (17) アメモ フラズ ユキモ フラン (雨も降らず、雪も降らない)

4.2 センの用法

センは主文の言い切りの表現だけで使われる。上のンのように仮定など他の表現には用いられることはない。

- (18) ポーネンカイデ ノメセン (忘年会で飲まないつもりだ) 1人称の意志
 (忘年会で飲みはしない) 3人称への評価期待

形を述べたところで、センには連体の形もあるとして、括弧に入れて出した。そこで次に問題の連体修飾表現であるが、これは当然の予想に反する3人称の行為を不本意なものとして評価する場合に用いられる。ただし前述のように、この連体表現の許容には個人差あるいは不明な点があって、当方言で確立した用法とは言えない。下の例は被修飾語の「奴」の意味に含まれたマイナスの評価に会わせた表現と考えられ、プラスの評価のときはあまり使わないようである。連体形は被修飾語の意味との関係で許容される場合もあるということであろう。

- (19) ?ノメセン ヤツモ オッタヨ (飲みもしない奴も居たよ)
 (20) ノマン ヤツモ オッタヨ (飲まない奴も居たよ)
 (21) Xノメセン センサーモ オラシタヨ (飲みもしない先生もいらっしやったよ)
 (22) ノマン センサーモ オラシタヨ (飲まない先生もいらっしやったよ)

センは原則として言いきりでしか使えないので、仮定の表現にしようとする、一度言い

切っておいて、それにナラをつけることになる。

(23) ノマナ トルナ (飲まなければ取るな)

(24) ノメセンナラ トルナ (飲みもしないのなら取るな)

以上のように、ンは全ての表現に使うことができるが、センは話し手の判断を述べる主文の言い切り（と一部の連体表現）だけで使用される。

5 ンとセンの文法的な相違

文を構成する要素には、伝えられる客観的な内容、それに対する話し手の判断、相手への働きかけの三つがある。本稿では、前の二つ、伝えられる内容を「表現内容」、話し手の判断を「表現態度」とし、その関係を[[表現内容]表現態度]と表記する。

これまでに見てきたように、ンの意味は客観的な否定であり、動詞＋ンは文構造の全ての場合に用いられる。この意味と用法から判断すると、ンで否定される事実は表現内容の一部をなしていると言える。センの方は、主観的な否定であり、例外を除けば、主文の言いきりで用いられるのみである。従ってセンで否定される判断は表現態度の一部である。ン・センの構文的な位置は次のようになる。

アメガ フラン [[雨が＋降る＋ン]]

アメガ フレセン [[雨が＋降る] セン]

これを文法的に見れば、ンは動詞に接続して文の成分の構成に関係しているが、センは表現内容全体に接続して文の構成に関っている。

ン [話し手 [主語＋動詞・否定] 叙述]

セン [話し手 [主語＋動詞] 判断否定]

以上から、当方言のンとセンの文法的な相違は次のように定義される。ンは表現内容の一部であり、動詞と結合して文の成分を構成するレベルである。センは話し手の表現態度の一部であり、表現内容と結合して文を構成するレベルである。当方言のンとセンは、文法的に異なるレベルのものであって、両者は、否定の強弱などというような意味の程度で説明できるものではないし、表現のゆれというようなものでも、場面や待遇などに関わる問題でもない。

この両者の関係は、前田(1955)のいう「論理価値」・「感情価値」に当たるとされるし、工藤(1992)の「客体的否定」・「主体的否定」とは基本的に同じである。他方言ともある程度一致している点から言っても、当方言についての上の定義は妥当なものであると思う。

6 ンとセンの主語と人称

本節では、人が主語で、その主語が形式で明示されていない文を扱う。センの場合、予想される肯定的内容を主観的に否定するのは話し手である。そのため主語の明示されていない文では主語になり得る人称が限られることがある。

6.1 一般の動詞

主語は明示されていなくても文脈などで分かる。一般の動詞の場合は話し手自身と他者の場合とがあるが、文脈によってはその一方が強調される場合もある。

(25) ニサンチ キガツカンヨ (二三日の間気づかないよ) 1・3人称

(26) ニサンチ キガツケセンヨ (二三日の間気づきはしないよ) 1・3人称

(25)は、二三日の間は気づかないという客観的な事実の叙述であり、状況とか話し手の心情とは関係がない。しかし(26)は、早く気づくのが望ましいが残念ながら気づかない、気づかないのが望ましいが二三日は気づかない、などという気持ちを込めた否定である。このように意志を含まない動詞で主語が明示されていない文では、主語が1人称と3人称の場合がある。しかし下の(27)のような場合、当然1人称と3人称の場合があるが、その行為の意志という面が強く出るような文脈で平板調のイントネーションで表現すれば「行かないつもりだ」という1人称の意志という意味合いが強くなる。

(27) ニサンチ イケセン (二三日の間行かない)

助詞「は」は格を表さないの、主語が明示されていないのと同じである。動詞の種類によっては「は」で示された人物は主格にも対格にも解され、この場合も主語が1人称と3人称の場合がある。話し手が主語になって花子には与えても太郎には与えないという場合と、太郎が主語になって他の誰かに与えないという場合である。

(28) タローワ ヤレセン (私は太郎には与えないつもりだ) 1人称の意志
(太郎は誰かに与えはしない) 3人称への評価・期待

6.2 他者に限られる場合

上にように、一般の動詞ではセンで自分のことを表現ができるが、一部の動詞では主語が他者、本稿の場合では3人称に限られる。

まず、当方言には本来の用法が他者の行為だけを表す形式がある。3人称への待遇を表現する派生接辞である。これらによる派生動詞はンやセンの否定文においても主語は当然他者だけである。動詞「くれる」なども同様である。

(29) カカッセン (お書きにならない) kak-aQse-φ-N

(30) カカッセーセン (お書きになりはしない) kak-aQse-e-seN

(31) カキヤガレセン (書きやがりはしない) kak-jagar-e-seN

一般の動詞でも、「知る」の場合、ンの否定文では主語は制限されないが、センが接続すると3人称だけとなる。

(32) コノカンジ シラン (この漢字を知らない) 1・3人称の事実

(33) コノカンジ シレセン (この漢字を知りもしない) 3人称への評価

シランは、その字が読めないという事実の叙述であり、それ以上の深い意味や話し手の判断はない。シレセンは、誰でも知っているような、当然知っているべき字を実は知らないのだという、他人の無知に対する話し手の評価を表す。同様のことは助詞「は」の文にもあり、センでは3人称のみとなる。

(34) アノコワ シラン (私はあの子を知らない) 1人称の事実

(あの子はそのことを知らない) 3人称の事実

(35) アノコワ シレセン (あの子はそのことを知りもしない) 3人称への評価

動詞の中でも「知る」は特殊な例であろう。種々の動詞を試したが、当方言では「知る」以外にこのような動詞は見当たらないようである。

同様のことはヨーの付いた可能表現にも言える。2種類の否定表現のうちヨー+動詞+ンでは主語が制限されないが、ヨー+動詞+センは3人称だけである。当然そのことができるはずなのに、実ばできないのだと話し手が判断評価しているのである。

(36) ヨー カカン (書くことができない) 1・3人称の事実

(37) ヨー カケセン (書くこともできやしない) 3人称への評価

以上のように、ヨー～センという可能表現の主語は限られる。前田(1955)は、このタイプの可能表現における主語の制限を、大阪方言のンとセンの持つ対自的・対他的という性質によると説明している。しかし本稿で述べてきているように、当方言ではセンで自分の意志や予定を表現することもある。前田の言う対自や対他は、当方言ではンとセンの持つ固有の役割ではなく、動詞など他との関係で生じた具体的な意味の一面であると思う。

7 ン・センの相違から言えること

前節までで見てきた例では、表現内容としての否定ではン、表現態度としての否定ではセンというものであった。このように大部分の動詞ではンとセンで2種類の否定表現が使い分けられるが、中には一方しか接続しない動詞がある。本稿で述べてきたンとセンの定義が妥当であれば、今度はその相違を利用して動詞や派生動詞を分類する一種の規準とすることもできる。以下でン・センの一方だけが接続する例を見て、この問題を考えたい。既に前田(1955)や工藤(2000)などに述べられていることもあるが、当方言での例で整理することにする。

7.1 全体で1単位をなすもの

主文の終わりでの否定表現でありながら、センの接続できない形式がある。ンとセンの相違を分類規準とすれば、接続するのがンだけということは、表現内容の一部としてだけ使用されるということである。

まず否定に対応する肯定の表現のないものには、ンだけが使われる。

(38) カカナ イカン (書かなければいけない)

(39) カカナ アカン (書かなければいけない)

(40) カカン ナラン (書かなければならない) <カカナ ナラン

(41) カクカモ シレン (書くかもしれない)

共通語で言うと、やはり肯定の表現がない「憎めない」「やむを得ない」「煮え切らない」なども「～ない」という一種の派生形容詞と認められ、方言形で言うとすれば、ニクメン、ヤムオエン、ニエキランであり、センは使えない。

同様のことは古語「ぬ」の残存形式についても言える。「思わぬ」「言い知れぬ」「言うに言われぬ」などの方言訳ではセンは使えない。

これらにセンが接続しないのは、先行の形式とンとが一体となっているからである。形式的には、ンは表現内容の中で動詞と結合して文の成分を構成するレベルであるから、先行の

動詞と一体化して1単位の形式を作ることができる。また意味の面でも1単位となっていて、イカンは、イカ+ンという二つの意味の合計ではなく、「駄目だ」という一つの意味になっていると考えられる。共通語でも「いけない」「ならない」「かもしれない」などは一体である。全体で1単位となっていて切れ目のないものの一部分を切り取って、それをセンで置き換えることはできない。またセンの方から言えば、センは話し手の判断を伴って文を終らせるという文レベルの役割を持つので、決り文句のような判断の及ばない表現や文成分の一部分として埋没してしまうような使い方はできないのである。

これらは起源的には動詞とンから構成されたものであるが、現代語では動詞としての意味や否定としての働きを失ったものと分類できる。

7.2 否定疑問による命令と依頼の表現

当方言に限ることではないが、相手に対する婉曲な命令表現や依頼表現に否定+疑問の形式が用いられることがある。この場合の否定にはンだけが使われる。

(42) ハッキリ イワンカ (はっきり言え) 相手への命令

(43) イッテ クレンカ (行ってくれよ) 相手への依頼

(42)(43)でのイワンカやクレンカの具体的な意味は、全体で相手に働きかけるという1単位のものである。しかしこれらは、イッテ クレンカのような肯定の表現もあり、形の上では動詞+否定+疑問という形になっている。これらは、上の決り文句とは異なり、動詞とシの間に切れ目があるので、ンをセンで置き換えることができる。ただしセンは表現態度であるから、この場合の意味には話し手の判断が加わり、個々の意味の合計としての本来の働きである疑問表現になる。

(44) ハッキリ イエセンカ (はっきり言いはしないのか) 疑問

(45) イッテ クレーセンカ (行ってくれはしないのか) 疑問

命令や依頼に使用された否定疑問の表現は、イカンなどの決り文句のように、形も意味も1単位として確立した形式ではない。このような文法的には2単位以上で文の具体的な意味では1単位という用法は、決り文句と一般の動詞との中間に位置すると分類できよう。

7.3 アルの否定

アル(有る)には逆にンが接続しない。客観的な否定表現アル+ンは形容詞ナイという補充形で表す。これは言い切りだけではなく、仮定表現その他も同様である。この現象も当方言だけの問題ではない。しかしセンはこのアルに接続できる。センには話し手の判断が加わっているから、「なくて残念」というような評価、あるいは「絶対にない」という強い確信などが含まれた意味となる。

(46) ヒマナンカ ナイヨ (暇なんかないよ)

(47) ヒマナンカ アレセンヨ (暇なんか有りゃしないよ)

アルは、センの否定表現に関しては、「読む」「書く」など一般の動詞と同様である。ただしアル+ンをナイで代用するという点では例外ということになる。

アルに関しては注目すべき点もある。当方言のアスペクトを表す接辞タルの起源は「て+ある」であるが、それには(48)のように、ンが接続するのである。共通語で「ある」の部分が

消えてしまうのと比べると、古い姿を残していると言える。

(48) カイタラン (書いてない)

7.4 一部の派生動詞の否定

一部の派生動詞には、場合によってンが使えないか、あるいは使いにくいものがある。それらを作る派生接辞の主なもの次は次のようである。

- 1) ーラカス (望ましくない原因によって意図しない不本意な結果をもたらす)
 サラ ワラカス (不注意や事故などで皿を割ってしまう)
 サイフ オトラカス (不注意や事故などで財布を落としてしまう)
- 2) ーカラカス (動詞連用形に接尾する共通語の「一まくる」の意味とほぼ同じ)
 ホン ヨミカラカス (本を読んで読んで読みまくる)
- 3) ーガル (形容詞語幹などに接尾する共通語の「一がる」と同じ)
 ウレシガル (嬉しがる)

これらによる派生動詞自体は表現内容の一部をなしているので、文法的にはンもセンも接続できる。連体・仮定などの表現では、当然ンが使われる。

- (49) ワラカサン ヨーニ ナッタ (不注意で割ってしまわなくなった)
- (50) オトラカサナ エーケド (不注意で落としてしまわなければいいけど)
- (51) ヨミカラカサン ヨーニ ナッタ (読みまくらなくなった)
- (52) ノミカラカサナ エーケド (飲みまくらなければいいけど)
- (53) ウレシガラン ヨーニ ナッタ (嬉しがらなくなった)
- (54) イキタガラナ エーケド (行きたがらなければいいけど)

しかし言い切る場合には、実際の例を見るとセンだけが接続し、ンは接続しない。接続させると誤用というわけでないが、普通には使われない。

- (55) ワラカセセン (不注意などで割ってしまうことをしない)
- (56) ヨミカラカセセン (読みまくりはしない)
- (57) ウレシガレセン (嬉しがりはしない)

言い切る場合にンが接続しないのは、派生動詞の意味にあると思う。これらの派生接辞の辞書的意味には、話し手の評価や推測という判断に似た意味が含まれているので、それを否定するには、主観的で判断の含まれるセンの方が接続しやすいということであると思う。ラカス+センを例に取れば、主語が話し手自身の場合は不本意な事態を引き起こさないという強い意志を、3人称の場合は動作主に対する話し手の期待や確信を表現している。それを否定するのにラカス+ンという客観的な否定であれば、「不本意な結果」という動詞の持つ主観的な意味が薄れてしまうだろう。また形容詞+ガルの場合は、恩恵を施してやった結果がウレシガランという客観的な否定では淡白過ぎる。面倒をみてやったので当然嬉しがるといふ状態が予想されるのに、「嬉しがりもしない」という話し手の不平不満が出てきて、主観的なセンの接続するのが当然である。このような派生動詞で言い切りにセンが使われるのは、意味的な関係が強く働いた結果であり、文法的な制約ではない。

主文の言い切りにセンだけが使われることを除けば、これらの接辞による派生動詞の文法的性質は一般の動詞と同じである。やや変格ではあるが、一般の動詞と同じグループに分類

できると思う。

当方言には同様の派生接辞は他にも見られる。上の例と同様に考えてよい。

- ータル (授受の「一てやる」に当たる)
- ーテマウ (授受の「一てもらう」に当たる)
- ータクル (過度に行う。上のーカラカスより成果が乏しく、マイナス評価)

等であり、例文は以下の通りである。

- (58) ホン カッタレセン (本を買ってやりはしない)
- (59) ホン トッテマエセン (本を取ってもらいはしない)
- (60) ベンキ ヌリタクレセン (ベンキを塗りまくりはしない)

7.5 トル・ヨルとン・セン

当方言にも、西日本諸方言と同様に、アスペクトの表現形式といわれるトルとヨルの両方がある。ただ犬山市と江南市の話者にはトル・ヨルの意味用法が確立しているが、扶桑町の話者は曖昧なところがある。従ってトル・ヨルに関しては扶桑町の話者を除く。

筆者は、当方言のヨルとトルはアスペクト的意味を表すペアではなく、文法的に異なるものであると考えている(丹羽 2001a)。私見によれば、トルは表現内容の一部として「実現した状態の継続」というアスペクト的意味を表現しているが、ヨルは話し手の目撃・確認や経験という表現態度を表す接辞である。従ってその関係は

- ホン ヨンドル [[本を+読む+トル]]
- ホン ヨミョール [[本を+読む] ヨル]

のようである。

トル・ヨルと本稿で述べてきたンとセンとの接続関係を見ると、上のトル・ヨルの相違から言って当然であるが、表現内容の一部である動詞+トルの文では、ン・センの両方が接続し得る。しかし表現態度として判断を表すヨルの否定にはセンだけしか接続しない。表現態度を表すヨルには表現内容を表すンは接続できないからである。

当方言のトル・ヨルとン・センについては既に口頭で発表した(丹羽 2001b)、ここではその文法的な関係だけを示せば、下ようになる。

- ヨンドラン [話し手 [動詞+アスペクト・否定] 叙述]
- ヨンドレセン [話し手 [動詞+アスペクト] 判断否定]
- ヨミョーレセン [話し手 [動詞] 目撃経験+判断否定]

ヨルは表現態度を表す形式であるから、その否定文には同じく表現態度を表すセンだけが接続する。ヨルが主観的で判断を表すのは、上述の派生動詞のように形式に与えられた辞書的意味によるのではなく、表現態度という文レベルでの文法的な役割によってである。従ってヨルは表現内容の中に現れることはないし、このようなヨルにンが接続できないのは文法的に定められていることである。

トルの接続した派生動詞は表現内容の一部であるから、他の一般の動詞と同じグループに分類されるのに対し、ヨルによる派生動詞はこの点で他の動詞とは全く異なるグループである。以上のように否定表現で比べると、丹羽(2001b)で述べたように、当方言のトルとヨルの相違も明確に見えてくる。

ま と め

当方言のンとセンは意味的にも文法的にも異なるものである。ンは否定的内容を客観的に叙述しているのに対し、センは肯定的内容を話し手の判断で否定する主観的表現である。また文法的には、ンは動詞を含む文の成分を構成する形式であり、センは話し手の判断を表す要素として文を構成する形式である。

またンとセンの相違を利用すれば、ンとセンの出現が制限されるいくつかの例も説明できるし、逆にそのことから、当方言のセンが話し手の表現態度を表すものであるということが確認できる。

引用文献

- 工藤真由美(1992)「宇和島方言の2つの否定形式」(『国文学解釈と鑑賞』57-7)
- 工藤真由美(2000)「否定の表現」(『時・否定と取り立て』岩波書店)
- 丹羽 一彌(2001a)「述語の構造とアスペクト表現形式」(『人文科学論集』<文化コミュニケーション学科編>35 信州大学人文学部)
- 丹羽 一彌(2001b)「否定表現で見るトルとヨルの相違—愛知県尾張北部方言—」(『国語学会2001年度秋季大会要旨集』)
- 前田 勇 (1955)「大阪方言における動詞打消法」(『東條操先生古希祝賀論文集』近畿方言学会)
- 山本 俊治(1981)「『ン』・『ヘン』をめぐって —大阪方言における否定法—」(藤原与一先生古希記念論集『方言学論叢 I』三省堂)